

5 果樹カメムシ類の発生予測 —スギ・ヒノキの花粉飛散量との関係—

ねらいと成果

昨年、度重なる台風の襲来に加え果樹カメムシ類の多発により、県北部の「二十世紀ナシ」は大きな被害を受けた。

ナシを加害するカメムシ類は、チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、ツヤアオカメムシなどであり、これらカメムシ類は、通常、スギ・ヒノキ等の針葉樹の毬果を餌として発育する。そのため、これら樹林の毬果の豊凶が、果樹の果実被害と深く関係すると考えられ、その関係が報告されている。

今回、健康福祉事務所(III 保健所)で実施しているスギ・ヒノキの花粉飛散量調査とナシ害虫発生予察事業における予察灯調査の最近12カ年のデータを比較し、兵庫県北部における春先のスギ・ヒノキ花粉飛散量と果樹カメムシ類発生についても同様の関係があることを確認した。

内容

豊岡健康福祉事務所で実施しているスギ・ヒノキの花粉飛散量の年次別推移をみると、西暦奇数年に多く、偶数年は比較的少ない。このように1年おきに変動を繰り返すのは、針葉樹の隔年結果性によるものと思われる。一方、朝来市の北部農業技術センターに設置した予察灯(60W白熱灯光源)

における果樹カメムシ類の年間誘殺数は、西暦偶数年に多く、奇数年には減少する傾向がある(図)。

花粉飛散量の多い年は、毬果量も相対的に増大し、果樹カメムシ類の成虫は餌場の針葉樹林で生息するため、果樹園への飛来数が減少する。逆に、花粉飛散量の少ない年は、針葉樹の毬果が不足するため、果樹園等へ成虫の分散飛来が増加し、果実被害が発生する。

ナシ園の多くは、スギ・ヒノキ等の植林地に隣接している。防蛾灯(黄色蛍光灯)により吸蛾類やカメムシ類の対策を行っているが、多発した場合、袋掛けを行っても、肥大した果実で膨らんだ袋の外から、果実内部へカメムシの口吻が差し込まれ、大きな被害が発生する。春先の花粉飛散量が少ない年ほど、産地ぐるみのカメムシ類の防除対策が必要である。

普及上の注意事項

近年、集合フェロモンを用いた果樹カメムシ類の発生活長調査が始まり、発生予察情報の精度アップが期待されているが、これらの情報に加え、春先のスギ・ヒノキ花粉飛散量の調査結果も参考にして、カメムシ対策に万全を期してほしい。

藤富正昭(北部農技 農業部)

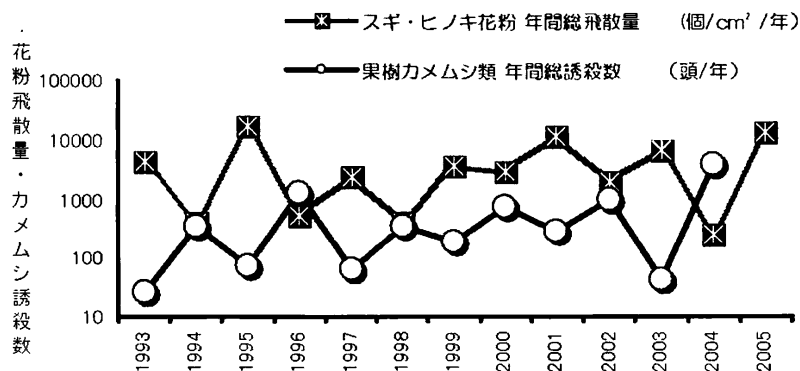


図 スギ・ヒノキ花粉飛散量とカメムシ類誘殺数の推移